

タオルの製造技術を活用した 特殊織物技術による服飾雑貨の開発・製造・販売

支援機関: えひめ産業振興財団

支援内容: 販路開拓

支援区分: 地域資源活用

工房織座

Information

【企業概要】

社名: 工房織座
代表者: 代表 武田 正利
業種: 製造業
所在地: 今治市玉川町鬼原甲55
設立: 平成17年11月
従業員: 5人



◆ 当社設立の背景、動機

当社代表は、40年近く今治市内のタオル会社に勤務、工場長としてタオルの製造に携わってきたが、海外製品に押される現状を目の当たりにし、従来品からの脱却を図るため、「コットンマフラー」の開発・製造を推進し、成功を収めた。

また、「コットンマフラー」の開発に並行して旧式織機の研究や復元なども行い、旧式織機には、高速革新織機ではできない技術の可能性があることを確かめていた。その後、タオル会社を退職し平成17年に「工房織座」を設立したが、これまでの経験を生かした独自技術による独自商品の生産・販売を行うことを経営方針としている。



◆ 事業概要

当社では、昭和初期に稼働していた旧式の着尺一列機織機きじゃくいちれつはたおりき「豊田式織機」を使用している。豊田式織機とは、昭和の初期に豊田佐吉りきしよつきにより作られた力織機である。しかし、現在、稼働している織機はほとんどなく、当社では廃棄処分され壊れている状態の織機を買い取り、復元し、改良することで、オリジナルの着尺一列機織機を製作した。

旧式の着尺一列機織機による独自の織り技術の研究の結果、新たな織り技術が確立され、この技術を用いたマフラー、ショール、帽子などの製品開発に着手、製品化し販路開拓を行ってきた。

今後もこれまでの取組みを踏まえ、特殊織物技術を活かしつつ、顧客ターゲット拡大を見据えたデザイン・素材などの面で商品バリエーションを増やした服飾雑貨を開発・製造する。また、展示会への出展やテストマーケティングにより更なる顧客ニーズの把握を行い、販路を開拓するとともに、パッケージを含めたデザイン面の改善、販売チャネルの見直しなどを行うことにより、売上の拡大を目指す。



旧式織機



◆ 商品概要

当社は「もじり織り」「よろけもじり織り」「筒織り」という独自の織り技術を用いながら、マフラー、ショール、帽子などの商品を生産・販売している。

もじり織り

もじり織りとは、二本のたて糸がよこ糸ともじり合ったように絡んで組織する織り方である。一見、粗い組織形成のように見えるが、たて糸、よこ糸がそれぞれ絡みあっているため、糸の素材感、柔らかさを残しながらも、非常に丈夫な織物に仕上がる。



筒織り

着尺一列機織機は、日本の反物のサイズでもある約40センチ巾より織物が作られている為、耳の縫製が不要となる。高速革新織機の場合は、2メートル近い巾から織られるため、必ず耳部分の縫製加工が必要となる。

縫製処理をすると、その部分が堅くなってしまいます。マフラーは直接首もとに巻かれるため、縫製した硬い部分が肌に触れると、ゴロゴロするような違和感がある。また、縫製をかけることで、タオルやハンカチのような雰囲気となり、マフラーとしてのデザイン性や、機機能が損なわれてしまう。

筒織りをする場合も同様、縫製を一切施していない。通常、筒状の織物を作る場合、一枚の布を筒にし、重なった部分に縫製をかけて筒状の織物を作る。しかし、旧式着尺一列機織機では、織っている状態から筒状に作られる。この技術を使い、コットンキャップ、ショールを製造している。



よろけもじり織り

当社では、もじり織りの技術に応用した独自の技法「よろけもじり織り」により、糸の形成が揺らいだ織物の研究開発をしてきた。当初たて糸が波のようにゆらいだ「たてよろけもじり織り」の開発に成功し、商品化し人気を集めた。

その技術をさらに発展させ、たて糸、よこ糸ともによろけを形成させた織物「たてよこよろけもじり織り」を昨年完成させた。たて糸、よこ糸ともによろけを形成させることで、一見凹凸感のあるような、幾何学的な模様を浮かび上がらせることができる。この「たてよこよろけもじり織り」は織物業界では初めて成し遂げた、現在当社でしか織ることのできない織物である。



◆拠点の具体的な支援内容

地域資源活用事業計画認定申請へのサポート

当社の技術は今治地域の地域産業資源であるタオル製造技術を活用しており、製造技術および技術を活用した製品は独自性が高いことから、地域資源活用事業計画への認定を打診したところ、ぜひ挑戦したいとのことであったため、認定申請の支援を行うことになった。

具体的には以下のような支援を実施した。

1 事業計画作成支援

- ◆ 市場ニーズなど外部環境の分析、自社が保有する独自資源など内部分析の検討
- ◆ 当事業における方向性、解決すべき課題の検討
- ◆ 事業実施期間における、製品開発、マーケティングなどの実施内容、実施スケジュール検討
- ◆ 事業実施期間における損益計画、資金計画の検討

2 関係支援機関との連携

認定申請にあたっては、当社に対する経営、販促支援を行っている(財)今治地域地場産業振興センターや四国地域支援事務局など関係支援機関と一体となった支援を行うべく、関係者会議の開催、共同でブラッシュアップを行うなどの支援体制構築を行った。

◆ 拠点を利用した事業者の声

地域資源活用事業計画の認定申請書作成は業務の合間を利用して行いましたが、慣れない作業も多くかつ短期間で行われたこともあり、非常にハードでした。しかし、今回の取組みを通じて、頭の中にしかなかった事業に対する考えを整理し計画書という目に見える形にしたことで事業の方向性や今後の目標、実施すべき

事柄を明確にすることができました。今後は、今回作成した事業計画を着実に実行して当社の独自技術、独自資源をより多くの消費者に受け入れてもらえるようにするとともに、愛媛県、今治市という地域には素晴らしい地域資源があるということもPRしていきたいと考えています。

代表 武田 正利

Staff voice

◆ 支援に携わったスタッフの声

今治市の地場産業であるタオル産業は海外からの安価な製品の輸入に押され、生産量はピーク時の三分の一ほどに減少しています。こうした厳しい状況のなか、各メーカーは新製品の開発や販路の拡大などにより売上の維持・拡大に懸命に取り組んでいます。

当社はタオルの生産技術や新製品開発ノウハウを活用して、他にはない独自の生産技術と製品を生み出しました。今回、地域資源活用事業計画の作成は、当社代表の長女であり営業・企画を担当している武田英里子氏が行いましたが、初回の打合せで事業に対する真摯な取組み姿勢が感じられ、支援することが楽しみでした。事業計画作成に入ってから、深夜早朝など多忙な業務の合間をぬって事業計画書を作成し、数度の修正要請にもすぐに応じていただくなど、その対応には頭

が下がる思いでした。

これから、計画を実行していくこととなります。計画書の作成も大変な作業でしたが、計画を実行し目標を達成していくことはさらに大変です。今後も引き続き支援させていただきつもりですので、気軽に声をかけていただきたいと思います。



応援コーディネーター
越智 豊